

2017年度 ボランティア活動報告「ボランティア学習会」

毎年行われている「ボランティア学習会」が今年も5月13日（土）に行われました。この学習会では、東日本大震災で被災した名取市閑上地区を訪問し、現地の語り部さんのお話を聞いたり、仮設住宅の集会所にて住民さんとお茶会をします。今年のバスツアーはあいにくの雨でしたが、50人以上の学生・教職員が参加しました。



語り部の長沼さんのお話を聞いている様子

閑上に向かうバスの中では、実際に被災した道路や建物などを見ながら、震災当初のお話と最近の状況を聞きました。日和山に着いてからは、語り部の長沼さんから、震災から6年経った閑上の様子や現在抱えている問題などのお話を聞きました。中でも「メディアなどで聞く“復興”とは、どうすれば“復興”したと言えるのか」というお話には考えさせられました。



その後「閑上の記憶」にて、震災直後に撮影された津波や震災後から続けている活動についての映像を観ました。涙を流す学生もいて、改めて震災の悲惨さを感じました。

「閑上の記憶」では震災直後の映像を見ることができます



昼食後、午後は愛島東部仮設の集会所にて住民さんとお茶会を開催しました。雨の日にも関わらず参加していただき、学生たちはたくさんお話をすることができ、終始笑顔があふれる楽しいひとときとなりました。

愛島東部仮設団地の集会所でのお茶会の様子

このバスツアーを通して、今後変わりつつある被災地へのボランティア活動についてや、住民の皆さん1人1人に寄り添う私たちにできることは何かを考える機会となりました。今回の学習会で学んだことを、今後の活動に活かしていきたいと思います。

愛島東部仮設団地の住民さんと会話をする学生



【参加した学生が考える“私の復興”】

学習会の中で語り部の長沼さんがお話された「“復興”って何だろう」という言葉がとても印象に残りました。最後の振り返りで参加者1人1人が自分の心に問いかけた“復興とは何か”の一部を紹介します。

・ボランティアをする前は土地や建物の復興が“復興”だと思っていた。しかし、
「前向きに、震災を受け入れて進んでいくことではないか」と思うようになった。
(人間心理学科 3年)

・一言で表すなら**“終わりはない”**と思う。
(人間心理学科 3年)

・震災が起きる前の状態に戻ることが復興だと思っていたが、そうではなく
被害にあった人たちの心の傷が癒えることを指しているのではないかと考える。
その為にはやはり新たなコミュニティ形成が不可欠だと思う。
(人間心理学科 3年)

・少しずつ人と人との**つながりを広げよう**とすること。
実際にあのときに何が起こっていたかを**しっかり把握**すること。
被災地の現状や、住民の方の現在の心境を**知ろう**とすること。
(子ども学科 2年)

・被災された方1人1人が周りの助けを借りながら
自分の足で次への一步を踏み出していくことが“復興”だと思う。
(人間心理学科 3年)

・どこまでが復興の終わりか。復興に**終わりはない**のではないかと考えたが、
今はまだ**はっきり分からない**。
(子ども学科 1年)

・震災前のような状態に戻ることだと思う。家があって、元の状態の暮らしが出来てはじめて
“復興”と言うのではないかと感じた。
(子ども学科 1年)

・**震災を忘れず**、悲しみや痛みを胸に抱えながらも**しっかりと生きて**、
自分の好きな場所、コミュニティで人々が暮らせるようになること。
(健康栄養学科 1年)

・“復興”は難しいが、**活気に戻る**ようになれば“復興”なのではないかと思う。
けど**終わりはなく**、**忘れない**、**思い続けられている**ことも“復興”なのではないかと思う。
(人間心理学科 3年)

文：人間心理学科 3年 伊藤ちひろ
(連携交流課 ワークスタディスタッフ)